

いたときは朝三時ごろであったと思う。一睡もせぬまままた山に出かけた。

十一月三日、雪の中に放り出されてから六か月、伐採、自動車への積み込み、有無蓋車への積み込み等、自由勝手に酷使されたが、最後までソ連に抵抗した部隊として、武装解除後からこの時点までは、何事にせよ最も劣悪な条件のもとに置かれたと思うし、感情的にもそのように扱われた感じがしてならない。

その後私たち七十二人は、ジプヘーゲン収容所から某中尉の指揮によりハバロフスクの収容所に移り、土木、建築を主体とした多色な仕事を経験した。そして約二年、第一分所を後にダモイのうそに胸おどらせて、ナホトカに向かい、第一分所から六分所へ、ここでも土木、建築作業である。昭和二十三年以降の引揚者が多くなったが、その栈橋拡張に伴って通稱石山で採石業務、運搬埋立等々行い、二年、昭和二十四年九月二十日、帰国の途についた。

## 限りなき望郷の想い

静岡県 高松 又吉

北滿、牡丹江駅より鉄路シベリア鉄道經由入ソ。イルクーツク地区、タイセット着（二十年十一月十二日）、第七収容所入所、七百人の部隊であった。部隊は混成部隊である。私たち二十四人は旧警備隊の気心の知った者たちであった。長い貨車輸送と俘虜という心理的不安、寒さと空腹、今まで経験したことのない試練、憔悴しきった私たちは、ただお互いの話すことといたら故郷の想いだけだった。早く帰りたい一心であった。

輸送中のある日、バイカル湖駅に着いたとき、皆は船の汽笛を聞き、ウラジオストクに着いた、もう帰国できると勘違いして大騒ぎした想い出がある。悲しいことである。望郷の気持ちと強制抑留という不安がいりまじり、自分の意志ではどうにもならないジレンマに、心はああ！

シベリアの十一月中旬は寒い。零下十度以下である。仮収容所は幕舎で、毛布一枚で、輸送中の着たきりスズメで、寒さは身にしみた。食べ物はといえば三百グラム

程度の黒パンと、塩鮭、水のようなスープ、それだけである。塩鮭をそのまま食えといわれても、日本人にはなじめないものであった。しかし、空腹とはどんな物でも口に入ってしまうものであると思った。

二、三日して防寒服、防寒靴が支給されて、どうにか寒さをしのげるようになった。しかし極寒の地で幕舎生活はつらい。だれの顔も元気なく、全く暗い幕舎生活であった。一週間目に移動の通達があった。囚人収容所であった所へ入ることになった。そこは人間生活がなんと出来る場所であった。ほっとした安堵感が部隊に漂い始めた。

そこで私たちの今後のことがソ連より通達された。その内容は、第二シベリア鉄道の建設である。森林の伐採、枕木の製作、鉄路の敷設、それに伴う居住地の建設等である。望郷の想いはどんなときでも忘れはしない。作業がきまってきた。今考えることは自分たちの健康のこと

である。一日も早く日本に帰りたい、みんなそう思っていた。

初めて経験する伐採作業は苦しかった。それにも増して苦しかったのは空腹との戦いである。腹いっぱい食べたとしても食物がない。少しのパンとスープの水腹であった。ああ、パンを腹いっぱい食べたいなあと思う日々であった。それが入ソ以来約三か月も続いた。飢餓地獄と言えと言えたのだから、私はあるとき、ソ連軍将校に給与のことを聞いてみた。そうしたら一人当たり黒パン三百五十グラム、砂糖、油十グラム、その他副食物一キロの支給があることがわかった。これだけ支給されているのに、なぜ空腹なのか。大きく疑問が浮かび上がった。

私たちの部隊は強制抑留後も、旧関東軍の組織で編成されていた。将校、下士官が実権を握っており、給与のパンその他をビンハネされてもだれも何も言えない実情であった。このことが部隊の飢餓の大きな原因であることを知った私たちは、所長と話し合い、部隊の給与に関しては自主管理することにした。このことにより空腹は

改善されたのである。こうしたことがあって、部隊からの将校の切り離しを行い、将校は将校たちだけの収容所に収容するよう、ソ軍に申し入れを行い、これが実行された。収容所の運営は選挙により委員会を設け、その運営をソ軍の了解の下に行うようにした。

抑留されて入ソ以来六か月をすぎたときであった。今までと違ってみんなで考え、みんなで相談していろいろな生活の改善が行われ、部隊の顔は日増しに明るくなっていった。このことは一人でも多く、無事で、日本に一日も早く帰れるようとの願いにはかならなかったのである。望郷の思いは日々に増す。

無味乾燥な生活でみなは何を求めているのか、一人で夕暮れに寂しく故郷の思い出を口ずさむ仲間を見たとき、私はみなで歌うことだと知った。そして堂々とシベリアの地で日本の歌を大声で歌うんだ、このことをみなと相談して実行に移した。収容所の中に舞台をつくり、日本の田舎芝居の実演と今の素人のど自慢であったが、心より収容所はゆれた。と同時に、ソ軍側の人たちも今までと違った目で私たちを見るようになり、いろいろな

話をするようになっていったのである。

こうしたことがあってから、六月だったと思う、日本との通信を申し入れ、許可された。故郷の両親、妻子、知人宛に今までの思いのたけを心から書き送った。当時私たちの住所は、ソ同盟ウラジオストク郵便局私書箱第七号であった。自分たちの現況を書き送ることにより、今までの不安と焦燥が大変に緩和されたことは事実であった。

また私たちの仲間は偉大であった。マンドリン、ギター、バイオリン、太鼓等を手づくりでつくり上げ、みなを喜ばせた。このようにいろいろな経過を経て、文化サークルの誕生となり、ソ軍の人々や現地ソ同盟の人々との音楽会の交流演芸会、あるいは劇団の結成による上演等々、自分たちの手でつくり上げた喜びは、同時に生きる喜びと、帰国への希望がよりふくらんだのであった。

一方、作業の状況はといえば、何とかノルマの遂行は達成されたが、もしそのノルマ以上に作業が進んだなら、賃金の支払いが我々にできないものであろうかと取

容所所長と話し合った結果、そのことが許可された。そこで部隊全員に、今までより組織された作業で無駄をなくし、全員ノルマ外の賃金を受け取れるよう話し合いを行い、同時に今までのソ軍の監視はそのまま、作業監督は自主管理を申し入れ、許可された。こうしたいろいろの経過を経て、作業状況は非常によくになり、所長も大変に喜んでくれたものである。

こうした変化の中で第一回の帰国命令が出た。当收容所から十五人ということであった。一番身体の弱い者十人と、ハラシヨラポータ五人とのものであった。委員会は直ちにその人選を行い、第一回帰国者十五人を全員で心より送り出した。昭和二十一年八月十日であった。

ラーゲルの空気は明るくなり、同時に日本への通信もよく行われ、良好な状態が続くようになっていった。昭和二十二年四月ごろ、当ラーゲルに日本新聞なるものが送られて来た。それによると、日本はアメリカの占領下で、国民の悲惨の状況が報道されており、みんなは自分の経験から親、妻子、兄妹のことを不安と心配でいろいろ話し合っていた。こうしたことはいよいよ望郷の思い

に心は募る一方であった。

いろいろのことがあったが、私たちの部隊全員は昭和二十四年七月二十四日、タイセットの收容所を出発、本当の帰国の途についていたのである。ナホトカは各地からの引揚者であふれていた。ナホトカの委員会はなぜか非常にセクト的であり、偏った共產主義者に思えた。私はそのとき、この人たちが日本へ帰ったらと思うと、心が冷たくなるものを感じた。

引揚船内は安心と疲れでみなよく眠って、口を開く者は少なかった。ただ、日本の鳥影が見えた途端、船上に出て大はしゃぎしたものだ。八月三十日、舞鶴に帰還することができた。今までのいろいろの出来事、また現在の社会状況を見るとき、戦争とは何か、深い反省と心よりの平和を祈るものである。